

カントと「義認」の問題 ―キリスト教との〔和解〕を求めて―

森 良太（上智大学）

18世紀の哲学者カントにとって「義認」の問題は、宗教的な意味でも考えられているのであろうか。「義認」とはキリスト教における概念であり、「神によって人が義と認められること」をいう。しかしカントの意図する「義認」とは、あくまでも自由意志を経ることでのみ実現されるものであり、キリスト教上の概念からは一定の距離を置くものである。事実、カントの著作は1827年にカトリック教会の「禁書目録」に掲載され、教会からは信仰を妨げる書物と見做された。

他方でキリスト教内部における「義認」の問題は、16世紀の宗教改革以来カトリックとプロテスタントの間で論争を呼び起こしてきた。しかし1999年に『義認の教理に関する共同宣言』（以下、『宣言』）が発表されて以来、双方の争いに一定の終止符が打たれたとされる。例えば2019年の20周年イベントでは、『宣言』により各教派はその＜相違点よりも共通点に基づき行動する＞という意味での〔和解〕へ大きく前進したと歓迎された。

そして今般、本発表ではカントと『宣言』のテキストにおける「義認」理解を相互に対比させることで、カントとキリスト教の間の〔和解〕の可能性を模索する。まず、罪からの再生という点に両者の「義認」論の共通的枠組みを認める。但しそこには、カントにおいては神の「恩寵」の下での人間の「自律」が「義認」より「先行」するが、『宣言』では神の「恩寵」がそのまま「義認」になるという構造上の相違があることを指摘する。さらに神に関して、カントにおいては人間の「自律」を「先行」させるものとして生じるが、『宣言』では霊的実体による業として人間理性に依存せずにはたらくという相違点を明らかにする。しかしこうした対立の争点も、カントの理性哲学が有する個性という形で収束され得るものであることを示す。そして「義認」の本質である霊的事実という共通性が、個性という相違性を肯定することにより、両者の〔和解〕がもたらされることを導きたい。